いとしま文化財情報 vol.16

全長約92m。糸島地域で二番目の大きさを誇る前方後円墳、井田原開古墳。糸島市教育委員会では、巨大古墳の実態の解明に向けて発掘調査を進めています。

巨大古墳の実態を探る ～井田原開古墳～

昨年度の調査で、古墳築造時の葺石や、「鰭付円筒埴輪」という九州では珍しい種類の埴輪片が見つかった井田原開古墳。今年度の調査では、後円部西裾付近で内行花文鏡片1点（横幅2・2㎝×縦幅2・9㎝×厚さ6㎜）が出土しました。これは後漢時代の中国で製作後、日本にもたらされたもので、この古墳の副葬品と推定されます。後世の開墾によって古墳が破壊された際、土砂に混じったものと考えられます。

この古墳では、過去に同様の青銅鏡片（福岡市博物館所蔵）が採集されており、鏡の形態や表面に赤色顔料が付着している点など、両者の特徴が一致。今回の出土品はこの鏡と同一のものであったとみられます。

また、後円部で古墳築造時の土層が確認され、この巨大古墳の墳丘の大半が盛土により造られたことが判明しました。さらに、周囲には浅い掘り込みが廻っており、墳丘全体が周溝によって囲われていた可能性も考えられます。

この古墳がこれだけ大規模な築造工事でつくられていたことは、古墳に埋葬されていた人物が強大な権力を持っていたことの裏付けといえるでしょう。

出土した内行花文鏡
※下の破片が今回出土したもの

井田原開古墳全景・手前が前方部

問い合わせ
糸島市文化課
☎（332）2093

博物館だより

伊都国歴史博物館●冬季企画展「糸島平家物語」

会期 1月21日（土）～3月25日（日）

今年のNHKの大河ドラマは『平清盛』。貴族が支配する社会から武士主導の社会へ移り変わる激動の時代を生きた人物が主人公です。

当時、糸島にも在地の武士が台頭し勢力を拡大していったといわれています。

1019（寛仁3）年には、大陸から侵攻してきた女真族が糸島に襲来し多くの損害を与えた事件「刀伊の入寇」が起こりましたが、これを撃退したのが志麻郡の住人・文室忠光ら在地の武士たちでした。

また、中世糸島の歴史に名を残す原田氏が糸島地方に勢力の基盤を築きあげたのもこのころです。二丈満吉の唐原地区に平家一門の一人、平重盛の内室たちが一時隠れ住み、これを保護したのが原田氏だと伝えられています。

今回の企画展では、平安時代から鎌倉時代にかけての糸島における武士の登場に関する資料や、平家落人伝説にまつわる遺品などを紹介いたします。

平重盛の遺髪を納めたと伝わる滑石製容器（龍国寺蔵）

入館料
大人　210円
高校生　100円
（65歳以上、中学生以下は無料）

申し込み・問い合わせ
伊都国歴史博物館
☎（322）7083

糸島人 vol.13

Itoshima Bito

夫婦二人三脚で、無理のない田舎暮らしを満喫中

自給自足生活の苦労と楽しさをまとめて自費出版

佐藤 哲郎 さん（志摩芥屋／69歳）
たゑ美 さん（66歳）

たわわに実った収穫間近の晩白柚（ばんぺいゆ）の前で、愛犬「司馬」と

福岡市から芥屋へ移住して9年。日々、農作業や自然とのふれあいを楽しみながら田舎暮らしを満喫している佐藤夫妻。このたび、夫婦二人三脚での奮闘記『「黄金の十五年」を田舎暮らしで』（アグレプランニング発行）を出版した。

紆余曲折の自給自足生活

環境問題や健康について関心を抱き始めた30年前、「自分たちが食べる野菜は自分たちで作ろう」と筑紫郡那珂川町の土地を購入。素人ゆえ畝の立て方も肥料の施し方も試行錯誤の中、週末のみの農作業が始まった。

その後、不耕起・無肥料・無農薬・無除草という自然農法に出合い、「この実践が成功すれば、思い描いた自給自足の夢が実現できる」と期待に胸を膨らませ、実践に適当な場所として芥屋を選択。まだまだ体力がある60歳で移住し、65歳で弁護士の仕事を一切辞め、自給自足生活に専念した。

自給自足生活では数多くの挫折を味わった。農薬を使わない状況では、収穫間近の作物は害虫や野鳥の格好の餌食となった。ヤギを飼うにしても毎日の乳搾りが必要で、子を産ませなければならない。ウコッケイ・シャモを飼ったが、飼料を微生物から作るとてもコストがかかった。さらに追い打ちをかけるように鳥インフルエンザ感染不安が襲った。「結論として、素人が農業を生業とすることは不可能だと分かった」。

それでも、「今は、農作業のまね事をしながら、ゆっくりと楽しんでいる」と、100坪の畑で無農薬による農作業を無理なく続けている。春はフキノトウやタラの芽・ウコギ・ツクシ、夏は夏野菜やブルーベリー、秋はサツマイモ・小松菜・春菊、冬は蕪や大根と、食卓には旬の野菜によるたゑ美さんの健康料理が並ぶ。

本のタイトルにある黄金の十五年とは、「65歳から80歳まで、仕事を辞め、何にも煩わされず思いどおりに暮らす期間」と哲郎さんが銘打ったもの。あらゆることに挑戦し、多くの失敗をしてきた経験から学んだ「自給自足生活は、必ずどこかで壁にぶつかる」ことをありのままに伝えている。この本には、今後田舎暮らしを考えている人たちに、充実した人生を送るための参考にしてほしいとの想いが詰まっている。

現在、黄金期間の真っただ中にある2人。毎日鳥や虫の声に季節の移ろいを感じ、地元の歴史を勉強しながら、愛犬「司馬」との3人の生活を謳歌中だ。

佐藤夫妻が出版した『「黄金の十五年」を田舎暮らしで』（2011年・アグレプランニング発行／右）と『司馬の部屋　芥屋で出会った生きものたち』（2010年・海鳥社発行／左）